学生たちの大学生活や教職課程を通じた学び

―コロナ禍の影響も含め―

岩田　一正

はじめに

拙稿「コロナ禍における学生たちの学びと日常」(『成城大学教職課程研究紀要』第 3 号、2021 年、45-86 頁)、同前「長期化するコロナ禍の学生への影響」(同前第 4 号、2022 年、59-88 頁）にも記したが、2020 年初頭からの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行によって、学生たちの生活は一変し、本学での研究や学習、あるいは部活動やサークル、行事といった課外活動、また本学以外での生活（家族や友人との関係、アルバイト、趣味など）といった多方面に大きな影響を受けるコロナ禍に見舞われている。

以下にレポートを収録している 2022 年度に本学を卒業する学生たちの多くは、本学に入学した 2019 年度のほとんどについては、入学前に不安交じりに期待し、想像していたような学生生活を送ることができたと思われるが、2020 年初頭からのコロナ禍によって、2020 年度以降の学生生活はそれまでのものとは大きく異なるものとなり、オンライン（ライヴ、オンデマンド）での受講、授業で課される数多くの課題への取り組み、また部活動やサークルの休止、アルバイトの業務やシフトの変更、あるいは退職、さらに家族や友人とのかかわり方の変容、他者とのコロナ禍を契機として露わになった価値観の相違などといった数多くの困難に直面し、それぞれとどうにか折り合いをつけながら日々を生きることとなった。

授業に関して言えば、2020 年度後期になると、教職課程の授業を始めとする一部の授業で対面授業が再開され、レポートを収録している学生たちはそれらの授業において、2022 年度に実施される教育実習や教員採用候補者選考に向けて、模擬授業や討論に取り組むことができるようになった。しかし、対面となったのは一部の授業であり、その授業でも、例えばグループの協同学習の方法や頻度は 2019 年度までとは異なるものとなった。

事実、大学ではないが、校内研修の講師を務めるために小学校や中学校のなかには、机が前方に向かい、各座席間にある程度の距離を確保した教室の空間構成を（会議場のレイアウトの名称として使用されている)「スクール型」と呼ぶようになった学校が現れ、その学校では、グループの協同学習を再開してはいるが、COVID-19 感染対応のために、実施する頻度や費やす時間、学習者同士のかかわり方が制限されたものとなり、基本的には「スクール型」で授業を実施している状況となっている。そして校長によれば、その学校では、以前とは異なって学力の二極分化（テスト・スコアの二峰性分布化）が生じているという。

学びを仮に「他者やテキスト（教材）の思考に即して考え、その思考を自分のものとすることを通じて、学んでいる対象に関する意味 (1) を形成すること」とするならば、オンライン授業でもテキスト（教材）の思考に即して考えることはできるが（かなり偏った読解となっているかもしれないが)、対面授業と比較すると、他者の思考に即して考える機会は少ない（そのような機会がないわけではないが、例えば対面授業で

あれば、隣の人がテキスト（教材）のどこを見ているのか、ノートに何を記しているのかを見ることができるけれども、オンライン授業はそのような機会を学習者に提供できない）ゆえに、対面授業の方がオンライン授業よりも学びに相応しい授業形態であると言える。

しかし、コロナ禍において再開された対面授業では、以前ほどには、グループの協同学習などに時間を費やせないために、他者の思考に即して考える機会を学習者に十分に提供できていないし、特に前記の「スクール型」を中心として実施される授業では、近くの人がテキスト（教材）の何を見ているのか、ノートに何を記しているのかを、学習者は覗き見ることもできない。このことが学習者に自らの躓きを放置させる一因となり、結果的に学力の二極化をもたらしていると考えることができる[(2)]。

同様の事態は、再開された大学の対面授業でも生じているのかもしれない。そうであるならば、対面授業が再開されても、実態としてはオンライン授業とあまり変わらない環境で学び続け、学習における躓きが解消されないままとなっている学生も存在していると考えられる。確かに 2020 年度後期から一部で対面授業が再開されたが、対面授業が提供すると想定される他者の思考を自分のものとする機会を、実際には学生に十分に提供できていないのかもしれないのである。

ここまで授業について記してきたが、それ以外にも本学では、中止されていた行事が再開されたり、許可が必要なものもあるが、課外活動が再開されたりしている。形式的には、2019 年度までの生活に近いものを学生たちに提供できるような状況が生じつつあるようにも見える。しかし、再開された対面授業について記したように、実際にそれらの生活において学生たちがどのような経験を蓄積しているのかは不透明である。

そこで、コロナ禍におけるオンライン授業への移行、それに続く対面授業の再開、あるいは授業・学習以外の生活のさまざまな面に生じた変容を通じて、今年度の卒業生たちは何を学び、経験し、それらをどのように意味づけているのかということに迫るために、2020・21 年度に引き続き、教職実践演習（中・高）の受講生に、次の課題でレポート（1,200 字以上）を執筆してもらうこととした。

以下の三つの課題から一つを選択肢、自身の経験（コロナ禍の影響を含む）について記しなさい。

a. 教職課程（教育実習を含む）での学び
b. 大学（部活動、サークルを含む）での学び
c. 4 年間の学生生活（大学での経験だけでなく、アルバイト、趣味、家族や友人との関係も含む）での学び

2020・21 年度とは異なり、コロナ禍が自身に及ぼした影響に特化した課題ではなかったが、大学入学後に大きな禍に襲われ、それとどうにか折り合いをつけながら大学生活を終えようとしている受講生が、学生生活を通じて何を学んだのかを記述してもらうことは、受講生自身が大学入学後の経験を省察することに資するだけでなく、自分自身の、また同一年齢集団の大学における研究や学習、また準備も含めた教育実習の経験、さらに学生生活を、将来的に回顧する手掛かりを提供するものとなり得る。そして受講生の記述は読者にとって、2019 ～ 22 年度の大学生の学生生活や教職課程がどのようなものであったのかを認識し、学ぶことができる貴重な史料となることであろう。

以下では、第一節に前記した a の課題について、第二節に b の課題について、第三節に c の課題について受講生たちが記したレポートを掲載する。提出されたレポートからいくつかを選別した上で掲載するのではなく、コロナ禍の影響の現れの個別具体性を考慮し、すべてのレポートを掲載する。但し、受講生には紀要

に自身のレポートを掲載することを希望しない者もいたし、匿名であれば掲載を許可する者もいたので、匿名となっているもの、未掲載のものも存在している。また、課題が十分には伝わっていなかったのか、課題に即したレポートとなっていなかったものも掲載しなかった。

レポートを掲載する際には、実習校名や指導教諭名など固有名を匿名化したり、明らかな誤字脱字を修正したり、読みやすさを考慮して読点を補ったり、改行を施したりしているが、それ以外は基本的には手を加えていない。そのため、語句の表記における揺らぎがレポート間に見られる場合があるかもしれないが、読者のご寛恕を乞いたい。

第一節　教育実習を含む教職課程における学び

本節には、教職課程を通じた学びを振り返ったレポートを掲載している。2020・21 年度のものと比較すると、今年度のレポートには、コロナ禍がもたらした学習や教育実習への影響と、そのような苦境への対処とがあまり記述されていないと言える。コロナ禍が継続するなかで、その生活への影響を受講生たちは当然視するようになり、そのような新たな状況と対話しながら学び続けていたのかもしれない。それでは、教職課程を通じて彼ら／彼女らはどのような経験を蓄積し、どのような学びの履歴を形成したのであろうか。レポートを読んでいくこととしよう。

1. 教職課程での学びを踏まえて　経済学部経済学科　福井勇汰

2020 年春先より新型コロナウイルスが拡大し、全ての授業がオンラインとなったことで、大学での学びは大きく変化した。私自身は、教職課程を 2 年次から履修したこともあり、対面で受講した科目は、教科教育法、教職実践演習、教育実習のみだった。教職課程での学びは、他の講義と比べて、周囲との意見交流といった双方向コミュニケーションに基づいたものが多いため、教職課程のオンラインを通じた学びの難しさを実感することとなった。

だが、2021 年後期からは一部授業が対面での実施に戻ったことで、何度か模擬授業を経験することができた。初めて模擬授業をして感じたことは、時間管理の難しさである。事前に授業で扱う範囲を決めていたものの、その全てを教えることはできなかった。これは 4 年次の教育実習でも感じたことだ。例えば、生徒によるワーク活動の所要時間が想定よりも長かった場合は、解説する箇所を限定するといった柔軟な対応が求められるが、数回の模擬授業や 2 週間の教育実習では満足のいく結果が得られなかった。

その他、教育実習では、生徒への発問の仕方について非常に勉強になった。当初は、生徒が答えやすいような発問をすることで彼らの自発性を高めることや、生徒の応答に対して適切なフォローをすることで答えた生徒が報われるようにすることが、正しい発問の仕方だと思っていたが、実習を通じて発問の仕方に対する常識が大きく変わった。例えば、ある教師の日本史の授業では、頻繁にペアワークを実施していたが、それは用語の確認といったものではなく、歴史の流れを互いに説明するというものだった。これは、生徒に発問の意図を理解させるという意味でも有効だと感じた。

実習全体としては、充実した時間を過ごせたが、その一方で悔しさも残った。実習先の教師からは「実習生は失敗して当然だ」と事前に言われていたが、これまで塾講師のアルバイトを経験してきたため、ある程

度完成度の高い授業ができると過信していた。だが、実際はいくつもの課題が見つかり、未熟さを痛感することとなった。そのため、教育実習を終えても、常に学び続けようとする姿勢を持ち、良い授業とは何かについて考えていきたいと思う。

人と関わっていくなかで大切なのは、互いの信頼関係をつくることである。そして、信頼関係を形成するためには、他者を理解し受容する必要がある。この点で、教育課程での学びは、これからの生き方について考えるきっかけとなった。

教育は全ての基盤であり、正解がないという意味で奥が深い分野である。実際、教職課程を終えた今でも、教育について多くの疑問が残っている。そのため、教育者として必要なのは、やはり学び続ける姿勢だといえる。これを社会科教諭に当てはめると、社会科の教師は、常に知識をアップデートしていかなければならないため、様々なことに対してアンテナをはる必要がある。したがって、大学卒業後も理想の教師像を追求していきたい。

2. コロナ禍と教育実習　経済学部経済学科学生

私は、千葉県にある母校の県立高校にて、2022 年 5 月末から 3 週間のあいだ教育実習を行わせていただいた。教育実習期間は、多くの経験を積むことができたとともに、普段受講している大学の授業だけでは実感できない教育現場の空気を感じながら過ごすことができた 3 週間であった。教員を目指している自分にとっては、将来に直接つながる有意義な時間となった。

教育実習を臨むにあたっては、自分のなかでコミュニケーションを 1 番大切にすることを意識して、教育実習をスタートさせた。先生方には、授業づくりはもちろんのこと、クラス運営や生徒との関わり方など、どのような意識で指導を行っているのか学びたいと考えていた。普段は大学生以外の学校種の違う子どもたちと触れ合う機会が少ないため、生徒とも積極的にコミュニケーションを図り、現在の高校生活への思いや自分の授業を受けた感想など、高校生からの視点でも多くの話を聞きたいと考えていた。

教育実習がスタートして、初日からさまざまな先生方の授業を見学させていただいた。導入部分で復習クイズを用意していたり、最近の話題や時事的問題などを授業の所々に盛り込んでいたりして、こうした生徒が常に意欲的に学べる工夫を参考にしていきたいと感じた。また、担当の指導教諭の方は、教科書にはない内容にも教材研究の時間を割いて、生徒が誰かに話したいと思えるようなおもしろい情報や知識などを授業のなかで盛り込んでいた。これによって、生徒が常に顔をあげて話を聞いてくれる授業をつくることができると学んだ。また、実際に教壇実習を行ってみて、同じ話題でも、問いかけ方次第で生徒の反応も変わってくることを実感できた。大学の授業のなかでも模擬授業を何度か経験したが、大学生の既習知識と高校生の既習知識では変わってくるため、高校生のその場の反応をリアルに感じながら、授業のなかで対応していけるような柔軟性を培うことができた。発問する際には、補足的な情報も加えながら、生徒の思考が止まらないように反応しやすい問いかけ方を今後も心がけていきたいと感じた。

教育実習期間には、学校行事の文化祭も行われたため、HR など文化祭準備の時間も利用しながら、生徒とコミュニケーションをとることができた。私の HR 担当は高校 3 年生だったため、高校入学時からコロナ禍の制限を受けての高校生活を過ごしていた代であった。生徒との会話のなかでは、「同じ学年なのにマスクを取った顔を見たことがない」といった話もあり、卒業アルバムで初めて顔を見ることができると聞いた時は胸が締め付けられる思いになった。昼休みにお弁当を食べる時間も、席の移動は禁止で、クラス全員が教壇の方向を向いて黙食するという決まりのもとで昼休みを過ごしており、自分が高校生であれば耐えがた

い制限であった。さらには、文化祭も例年に近いかたちで校内公開だけでなく、保護者が入場可能な一般公開も予定されていたが、学校内で新型コロナウイルスの感染者が増加してきてしまったため、一般公開は中止になってしまった。高校3年生は最後の文化祭で、初めて保護者を招くことができることを楽しみにしていた。それでも、この事態を受けても悔しい思いは胸にしまって、前を向いてあらゆる制限のなかで楽しみを作り出して過ごしている姿に高校生の心の強さを感じた。教育実習期間は、生徒を支えて、共に歩みたいという教員志望の思いがより一層強まった3週間であり、今後の自分にとって励みになる貴重な機会であった。

3. 教職課程を通して学んだこと　文芸学部国文学科学生

私は、4年間の教職課程を通して、数え切れないほど多くのことを学んできた。その中でも、特に大切なものについて記していく。

教職課程を受けると、他の学生とは異なり、授業の数も多く、余剰単位がいくつもあり、私で言えば国文学科の授業を数多く受けることを意味している。これは多くの教育学部とは異なる形式であり、教科について深く学び、それと併せて教育に関する学習も行ってきたことで、教育学部出身者とはまた異なる、魅力的な教員を目指すことができていると認識している。

一言で教職課程と言っても、その内容は実に多様であり、幅広いものとなっている。教育法等の、教師になるための知識を勉強するものや、教職実践演習等の、教師の現場に関する実践的なものをはじめ、教育史で教育の歴史を学んだり、スポーツウェルネスで体育を学んだりと本当に多種多様な講義が教職課程には含まれており、幅広い知識、経験を得ることができた。特に教育法の講義では、学年での受講者が少なかったことも相まって、何度も何度も模擬授業を行い、その度によかったところ、直すべきところについて話し合い、自分の授業のスタイルが身についた。初めて授業内で模擬授業を行った時と比べると、天と地の差であろう。

その中でも、やはり一番印象に残っているのは教育実習である。想像はしていたものの、本当に大変な、密度の濃い3週間だった。生徒を前に実際に教壇に立ち、現役の先生方の仕事を間近で拝見しながら、3年間の教職課程で学んだことを実践することができたのは、何よりも経験として大きいものであったし、私の財産になった。何度も授業を経て、試行錯誤しながら、より良い授業ができるようにと考え実践していったことは、今でもよく覚えているし、これからもそれの繰り返しになるが、まずはその第一歩を踏み出すことができ、これからもこの気持ちを忘れないでいようと思う。辛いことや大変なことばかりだったが、何人もの生徒に、「先生学校に残って欲しいです」「先生の授業の方が面白くてわかりやすかったです」と言われた時は努力が報われた気がしたし、本当に嬉しくて涙が出そうだった。これを糧にこれからも頑張ろうと思う。

4年間の教職課程は、周りの友達よりいくつも多くの単位を取り、忙しく、大変なものであったが、教師になるために必要な知識、教師になってからのための学習、またそれらの実践的な経験、そのどれもが密度の濃い、私にとって必要なものであった。特に教職実践演習の講義は、実践を用いて問題の対処法について話し合ったりすることで、適切な判断力を身につけることができ、またそんな方法もあるのかと何度も驚かされ、引き出しが増えた。教育実習での経験も含めて、4年間の教職課程の集大成として、実践的な内容が多く、今後長く使うことのできるスキルを身につけることができたものであった。教職課程で学んだ多くの知識、経験、スキルを今後余すことなく活かしていきたい。

4. 私の教職課程、学びとそれ以外　文芸学部国文学科　篠原健

失敗だったような気もする。

先日、小谷野敦が「ホンネとホント」というエッセイで、以下のことを綴っていた。

> 私は大学四年の時に、地元の出身中学校で二週間の教育実習をしたのだが、成績はＢで、きっといい成績ではないのだろう。結局、「教育原理」を落としてしまい、朝一限に家から遠い駒場で開講されるこれを再度履修できず、教員免許はとらずじまいになった。

比較文学、文芸評論で異彩を放つ小谷野が、教育実習Ｂ！　しかも「教育原理」の単位を落として、教員免許は取らずじまい。

私はこのエッセイを目にしたとき、単純な驚きと浅からぬ共感があった。『「男の恋」の文学史』・『江戸幻想批判』を著した小谷野が、まさか教育実習でＢを取っているとは！　という驚愕はさておき、私も教育実習では、小谷野と同程度、つまり教育実習がＢだったからだ。

小谷野は東京大学に入学して、英文科に進んだ。私の記憶に間違いがなければ、英語の教師になっておけば食いっぱぐれないから、という理由で教員免許を取得しようとしたはずだ。私も、小谷野とあまり変わらない動機で教職課程を取った。文芸学部に、世間的に言えば文学部に入ったのだから教員免許でも取得しておくかという気持ちで、「大変だ」と言われる教育課程を取った。そんなに「大変だった」という気はしない。一年、二年に受けた岩田先生の授業は面白く、国語科の西村先生・小山田先生の授業は楽しかった。むしろ、そういう学業的な「大変」さというのはほとんどなかった気がする。

それでは「大変」なことがなかったかと問われると、そういうわけではない。ただ学業の「大変」さがなかっただけで、他はいろいろ大変だった。そのなかでも、特に「大変」だったのは、教育実習である。小谷野は、先の引用に続けて、次のことを述べる。苦手なサッカーに、生徒からの要望があって参加させられそうになったが、それを「私がボールを蹴ると、その行先は神様しか分からない…」と苦笑しながら答えると、教育実習の「若い女性」の指導教諭が「小谷野先生も楽しめる試合にしたい」と言い、「私の言いたいことは分かりますね」といい、「ホンネで接していい場合と…」と釘を刺した。そこで小谷野は

> 私は「ホンネじゃないんだ、ホントなんだ」と内心で叫んでいたが、まあそういうことが積み重なってのＢであったという気がする。

私の教育実習も、こういう指導教諭との致命的なズレのなかで、さまざまな屈折があった。詳述はしないが、こういう類の、ズレである。しかも、私の指導教諭と同じ「若い女性」の指導教諭だというのだから、「若い女性」の実習生の指導教諭とはこういう喋り方をするのか、と小さく笑ってしまう始末だ。

そういう価値観のズレ、人間関係のズレが、私の教育実習だと「大変」だった気がする。いや友人関係には恵まれ、教師運もそこそこあったと思うが、兎に角、「教育実習」が「大変」だった。おそらく小谷野と違うのは、それがかなり精神的にキツかったということだ。まだ短い人生だが、そのなかでも屈指に辛い３週間前だった。

冒頭の、失敗だったような気もする、とはそれを指す言葉である。教育実習に参加して失敗だったような気もする。あんな「大変」なことには、参加しない方がよかったんじゃないか？　私は結構傷を負ったし、

それを後悔する日も実に多い。また、想像を広げ、教職課程の結実が教育実習だとするのならば、教職課程を取ったことすら間違いだったのではないか、とも……。

だが、私は否定したい。まだ、それと決別するには至っていないが、私が授業で学んだことは、確実に大きい。模擬授業だって、一種のプレゼンテーションの訓練だと思えば、人生に於いて役に立たぬ筈はない技術である。それだけでなく、教育史も、特別支援教育も、私はそれに関連する書籍を読み、知を拡充した。知的には、とても楽しかった。だが、それであの経験を無化できるわけではない。キツかったし、それは一種の Trauma である。教育実習には、参加しない方がよかったのではないか？

だか、と私は逆説の接続詞を文頭に置く。その経験だけで、四年間の学びの価値を否定できないことも、また私の中で事実である。未だ割り切れていないが、私は、「だが」とこの四年間の成功・失敗の決断を保留しつづけている。

5. 教職課程（教育実習を含む）での学び　文芸学部英文学科学生

大学で教職課程を通して学んだことは大きく 2 つあると考える。1 つは教職そのものに関する知識や実践的な学びであり、将来教壇に立った際に役立つであろうことを学んだ。私は中学校でボランティアもやらせてもらっていたため、教職の授業で学んだことを実際中学校で生かしたり、ボランティアで悩んでいることを教職の授業で解決できるよう授業に臨んだりして、教育について理論と実践のどちらも学ぶことができたと思う。もう 1 つは、直接教育に関わる場面だけでなく、日常生活にも役に立つ学びであり、普段の人間関係や生活を豊かにするような知識を得た。意外に思われるかもしれないが、教職で学んだことで大学生の人間関係にも応用できることがあり、教職に就く就かないに関わらず、自分や周りの人の人生を豊かにするような学びを、教職課程を通して学ぶことができた。

まずは教職そのものに役立てる学びについて述べたい。そもそも私は将来的に教員という仕事を視野に入れていたため免許は必ず取得しようと決めていたが、教員になるかどうかは、大学入学当時はあまり真剣に考えていなかった。しかし、教職課程の授業を通して、「自分が教員になったらこうしたい」や「自分が学生時代辛かったことはこんな原因があったんだ」といった考えが浮かび、いつか教員になりたいと思うようになった。中でも大学 2 年生の時は身近な中学生の死や、教職の授業、ボランティア活動を通して「教員になりたい」という気持ちが、「教員になって子どもの心を救いたい」という強い思いに変わったのを覚えている。

教職の授業で学んだことは多くあるが、中でも印象に残っているのが、「地域や保護者、専門機関、他の教員と連携を取ること」「生徒との信頼関係が重要で、生徒の思いを受け止めてあげることが重要」であることである。前者について、教職の多くの授業で学校と地域、保護者との連携の重要性について学んだ。それまで教師は授業など、一人で準備をしてクラスを指導するイメージがあったが、一人では全員の生徒を多角的に見ることはできないと分かった。学校内では他の教員と、学校外では地域や保護者と協力し、開かれた学校を作ることが重要だと分かった。

特に、障害を持つ生徒について学んだ際に学校内外の連携の重要性を学んだ。障害を持つ生徒に限った話ではないが、学校は生徒の命を預かっていて、常に危険と隣合わせということを強く認識し、一人の教員として責任を持つのはもちろん大事だが、外部機関や地域など他の人の力を借りることが非常に重要だと分かった。先述したボランティア先の中学校で、ダウン症の生徒を見る機会があったのだが、気を抜くとその生徒も他の生徒も怪我をする可能性があり、自分ひとりだけで解決するのではなく、他のサポーターや先生

方と連携して、常に報告して支えることが必要だと感じた。

教育実習でも、現場の先生方は非常に忙しく、何でも相談や質問をしても良いというわけではなかったが、生徒のことを考え隙を見つけて早めの連絡や相談をすることで、生徒により誠実に向き合うことができたと思う。授業や生徒指導は正解もゴールもなく、迷い続ける仕事であると思うが、色々な人の意見を聞きながら、答えを模索し続けることで、生徒にとって良い教員に近づけるのではないかと考えるようになった。

後者について、教師は何かを伝えたり、話したりすることが重要だと思っていたが、意外にも生徒を「待つ」こと、生徒の話を「聴く」ことの方が重要であると学んだ。例えば、授業をする際にも教師が話す量よりも生徒が話す量が多くなることが大事で、教師は知っていることを全て教えれば良いというわけではないと分かった。時には「教えない」ことも重要で、「伝え過ぎないこと」が意外にも難しいことを学んだ。

また、普段から生徒の声に耳を傾けるだけでなく、自分の発する言葉に責任を持つことが重要だと考える。これは私のボランティア先の中学校での失敗体験に基づく。ある生徒が一緒に歩いて家に帰りたいと頼んできて、じゃんけんで勝ったら一緒に歩いて帰ってほしいというお願いに対し、歩ける距離ではないため冗談だと思い、軽い気持ちでじゃんけんをしてしまった。じゃんけんに負け、一緒に帰ろうという生徒に「ごめん、冗談だと思ったんだ」というと、「嘘つき」と言われ、心を閉ざされてしまったのを覚えている。

その後、一緒に帰るなどの約束をしたらきちんと守る、その子の言葉を丁寧に聞くようにするなど意識をすると、どうして生徒が歩いて帰りたかったのか、家に帰りたくなかったのかの理由を漏らしてくれるようになった。つい答えを急いでしまいそうになるが、生徒と信頼関係を築き、「辛いよね」「私もそういうことあった」などの言葉で共感すると、自然と悩みを打ち明けてくれることもあるのだと気付いた。教育実習でもとにかく生徒と話すことを意識し、休み時間や放課後も積極的に声をかけると、生徒が心を開いてくれるようになり、生徒から授業や生活指導のヒントを得ることができた。この他にも教職で学んだことは数多くあるが、ここでは以上に留めておきたい。

次に、教職で学んだことが日常生活で活かせた話をしたい。まず、生徒の相談に乗る際に使える傾聴の方法やテクニックが、普段友達や後輩、家族の相談に乗る際にも活用することができた。例えば、妹に人生相談を受けた時、以前は何か結論を出さなくてはいけないと思い、必死に解決策を提示すると、「気持ちを分かってくれない」と何度か怒られたことがあった。しかし、教職で傾聴について学んでからは、否定や結論から入るのではなく、どんな気持ちも「確かにそれは辛いよね」「〇〇は悪くないよ」などと相手の存在や気持ちを認めることで、「そうなんだよ」と胸中を述べてくれるようになった。しかし解決策を求められることもあり、傾聴とアドバイスのバランスは難しいが、教職で学ぶ前よりも格段に妹を怒らせることは減った。大学の後輩の相談に乗った際も、時間をかけてでも気持ちに寄り添い、答えは出せなくても一緒に悩み、一緒に考えることでその人なりに答えを出す支えができた。

また、青年心理学などで愛着障害や非行の裏にあるその人が抱える問題について学び、苦手意識のあった問題行動の多い後輩への見方が変わったことがあった。これまで問題行動が絶えない後輩に手を焼いていて、苦手意識があったが、その子の行動の裏側や育ったバックグラウンドを考えるようになり、苦手意識は、心配や、その子に向き合いたいと言う気持ちに変わった。青年心理学で学んだ事例に必ずしもあてはめることはできないと思うが、似たケースを参照し、その子自身と向き合うことで、問題行動を減らし、その子の良さに気付くことができた。

他の人だけでなく、自分自身への理解を深められたこともある。特別支援教育概論などで障害についても学び、障害は特性で、誰にでもあると分かると他者にも自分にも寛容になることができた。例えば、自分は

普段生活する中でルールや数に意味を持たせ、それに縛られていたが、それは誰でもそうなのではなく、自分の中の「こだわり」なのだと分かった。自分の生きづらさに理由があると分かると安心し、様々な特性についても学ぶことができた。今までは努力不足だと自分を責めてきた部分も、「自分はどうしてもこういうことが苦手なんだな、じゃあやり方を変えよう」と考え方を変えることができた。そして、他の人も何か苦しんでいるのではないかと考えるようになり、自分にしかわからない辛さはきっと誰しも抱えているのだと考え、だからこそ寄り添えるようになりたいと思うようになった。障害について学ぶことで、どこか「違う世界」と思っていた障害が身近に感じ、教室だけでなく社会でのインクルージョンということに関心を持つようになった。

以上のように、教職課程で学んだことは、直接教育の場にも、日常生活にも役に立った。最後に、4 年間教職で学んできて、嬉しかった体験を書きたい。一つ目はボランティア先の中学校の運動会で、絶対にリレーで走ろうとしない生徒とずっと対話をしていたら、その子が最後に走ってくれた経験である。自分の影響がどれだけあったかは分からないが、少しでも生徒の支えになり、影響を与えて行動を変えたことがとても嬉しかった。もう一つは、教育実習で生徒との対話からヒントを得て組み立てた授業の後、生徒が「初めて手を挙げた」と言ってくれたことである。どちらも、自分の行動が生徒の行動に影響を与え、生徒の変化や成長を身近で見られたことにとてもやりがいや喜びを感じたのを覚えている。いつか教職に就いた時に、答えを模索しながら生徒に寄り添い、生徒の成長を身近で喜べるような教師になりたいと考える。そのために教職課程で学んだことを頭に入れつつ、教師になった際にも通じるような傾聴力やその他の力を社会人になっても身に付けたいと考える。

6. 教職課程（教育実習を含む）での学び　文芸学部英文学科学生

周りの同級生に 1 年遅れて入学した私は、かねてからの夢だった、中学校の教員になるために教職課程を履修した。教職課程を履修していない他の生徒よりも多くの授業をとらなければならず、1 年生の時は大変だった。2 年生は、コロナの影響もあり、全ての授業がオンライン授業になったが、それでも履修する授業は多く、1 日中パソコンとにらめっこしても課題が終わらなかった。3 年生では、少しずつ対面授業が増え、友達と再会できたことが嬉しかったことを今でも覚えている。4 年生になり、教職課程の天王山となる教育実習に 5 月に行った。教育実習は得るものがとても多く、充実したものになった。本文では私の教育実習の前後での変化について述べる。

教育実習に行く前は、とても緊張していた。授業の進め方として、教科書の全ての範囲を予習しておく必要があったので、音読や練習をしたり、導入を考えたりしていた。また、授業で学んだ生徒との対応、指導案の作り方を復習していた。ずっと夢だった教師になるために必要なことであったため、緊張もあり、楽しみもあったりしていた。

教育実習では、私の出身区の公立中学校で 3 週間実習させていただいた。担当ホームルームクラスは 2 年生で、英語の担当学年は 1 年生であった。ちょうど運動会の準備期間と重なっていたため、ホームルームクラスの生徒とはなかなかコミュニケーションをとることができなかったが、だんだんと話す時間が増え、最後には寄せ書きをもらった。一生の宝物になった。

担当授業では、自分の英語のできなさを身に沁みて感じることとなった。現在、中学校ではオールイングリッシュで授業しなければならず、とっさに英語が出てこなかったことが悔やまれる。また、私の発音が悪いことも、指導教諭や校長先生からご指摘をいただいた。今まで勉強してきたことが、圧倒的に不足してい

たことを痛感させられた。授業がうまくいかず、落ち込んでいても次の日には授業があるため、自分ができる精一杯の準備をして授業に臨んだ。納得できるいい授業は１回もできなかった。しかし、生徒との関わりをこの肌で学べたことはとても大切な学びであった。別れを惜しんでくれる生徒や、私の好きなキャラを描いてくれた生徒もいた。そんな生徒達に私の知識不足でいい授業を受けさせられなかったと思うと、悔しさの残る教育実習となった。

教育実習に行った後でも、自分の英語のできなさを改めて感じ、このまま先生になるわけには行かないと思い、英語の勉強をさらに進め、指導技術や生徒達に興味のある授業をできるように、そして、自分の知見を広げるためにもまだ先生にはならず、勉強を続けていきたいと考えるようになった。そこで大学院に進学し、言語習得についての研究し、加えて TESOL を取得し、生徒のためによりよい授業ができるように、勉強を進めていこうと考えている。

教職課程を選択していなければ、教育実習に行くことはなく、辛かったがとても貴重な体験をすることができなかった。たくさんの授業を履修し、自分のできないところを痛感させられるといった、本当に辛いことばかりであったが、自分を成長させることができた、人生においてのターニングポイントと言っても過言ではないと考える。大学４年間で学んだ教職の知識は、私の人生において大きな役割を与えるものだった。

7. 教職課程（教育実習を含む）での学び　文芸学部英文学科学生

私は中学生の頃から生徒に寄り添うことができる教師になりたいという想いがあり、大学では教職課程を履修しました。教職課程での学びや教育実習を通して教師は勉強を教えるだけの存在ではないということが分かり、教師という仕事を少しずつ理解することができたと感じています。

教職課程の授業での学びでは、新聞で取り上げられた教育に関する問題を話し合ったり、模擬授業を他の受講生に見てもらい感想を聞いたりし、こういう時にはこう対処しなければならないということを含めてとても深い学びができたと思います。

教職課程の中でも印象に残っていることは、コロナ禍の影響でオンデマンド資料受講をするだけになってしまいましたが、介護等体験での学びです。教職課程では、視覚障がいや聴覚障がいなど、障がいについて詳しく学ぶ必要はないものだと思っていました。しかし最近では、障がい児と健常者が一緒に学ぶことも増え、どのような取り組みを行っているのかを知り、私も学びを通して同じ教室で対等に学べる環境を作っていきたいと思いました。

特に私は視覚障がい児の指導方法について学びました。視覚障がい児が授業で扱う教材は、点字を使ったものや弱視の児童のために拡大文字、拡大図版を用いたものなど、彼らの視覚症状に合わせて選ばれていること、教師が黒板に文字を書くときは文字の大きさに注意し、青や黄色など文字が見えにくいチョークを使うのではなく、白色のようにはっきりと文字が見えるものを使うことが求められ、教室でも床に物を置かないようにするといった環境への配慮も行われていることなど、学ばなければ理解しようとしなかったことが沢山分かり、とても良い学びだったと感じています。オンデマンド受講ではありましたが、視覚障がい児については詳しく知ることができたと感じています。コロナ禍で難しいとは思いましたが、学ぶことができなかった介護についても学ぶことができたらと思い、更に他の事にも興味が湧きました。

他に印象に残っていることは、大学４年生の時に行った教育実習です。昔からあがり症な私は、人前で話すことが苦手で模擬授業など上手くいかず、教職課程を辞めてしまおうと思っていました。しかし教育実習での学びを通して、生徒の成長に携わることができる教師の素晴らしさと難しさを感じることができ、辞め

なくて良かったと今は思います。

教壇実習では、毎回自分の課題が見つかり、反省しては克服してという動作が永遠に続いていくものだと感じました。指導教諭のお話のなかにあった「教師は教師になることが本当のゴールではなく、教師になってもずっと学び続ける」「授業は教師一人が作るものではなく、生徒と一緒に作るものであり、生徒との信頼関係を築くことが最も重要な事である」という言葉がとても印象に残っていて、教育実習での学びのまとめといっても良いようなお言葉だと思います。教育実習校の職員の皆さんや指導教諭、授業を一緒に盛り上げ支えてくれた担当学級の皆さんのおかげで充実した教育実習を受けることができ、自分自身の将来を見直すきっかけにもなりました。

私は教職課程を経験して教師になる覚悟がまだ足りないということが分かり、自分の学力をより高め将来多くの子供に寄り添うことができる人になりたいと思いました。また子供と関わる仕事を続けていたいという新たな夢も、教職課程の学びを通して見つけることができました。

8. 教職課程を終えて　文芸学部文化史学科学生

教職課程を終えて、印象に残っていることや、勉強になったことを、大学内の授業と、教育実習に分けて記述していきたいと思う。

まず、大学内の授業について述べていきたいと思う。1 年生の時に、教職課程の説明会で「教職課程は、教職課程を取っていない人に比べて単位も多く、やることもたくさんあるので、忙しくなります。それでも、続ける覚悟はありますか。」と問われた。その言葉を聞いたとき、自分に続けることができるか不安になったが、自身の将来の夢を実現するため、最後まで履修することができた。結果的に教師になる夢とは違う進路を進むことになってしまったが、私は教職課程を履修して良かったと感じている。

教職課程の授業を通して学んだことは、子どもたちを取り巻く問題について知ることができたことである。例えば、いじめ問題や部活での体罰問題などの学校内での問題から、生徒の家庭で抱えている問題、虐待や貧困、ヤングケアラーなどの問題についても事例を読み、教師としてどのようにアプローチができるかクラスで話し合った。これらの問題は、ニュースではそこまで深くは掘り下げられない。このような機会がなければ、私は子どもたちがどのような困難を抱えているのかを知らないまま過ごしていただろう。

取り上げた事例の中で、特に印象に残っているのが、『市民性を育てる生徒指導･進路指導』の「柏木実践」である。クラスでいじめが起きたとき、柏木は、いじめの被害者と加害者だけで問題を解決しようとはせず、クラス全体で問題を共有し、いじめの被害者を孤立させないように働きかけた。その結果、クラス全体に当事者意識をもたせることができ、いじめの被害者と加害者にも良いアプローチをすることができた。いじめに直接関わりのない生徒にも当事者意識をもたせることは、なかなか難しい試みだが、この実践は、とても参考になる事例だった。また、いじめの加害者も何らかの抑圧を受けている可能性があることがわかり、加害者にもケアが必要だと感じた。

次に、教育実習での体験について述べていきたいと思う。私は母校の高校で、3 週間実習を行わせていただいた。担当科目は日本史 B で、授業実践がはじまってからは、週に 9 回授業を担当した。正直に言うと、回数が多く、負担が大きかったが、回数を重ねるごとに、前回の授業での反省点を実践で改善することができるので、新しい授業方法を試すことができたのはとても良い経験だった。

実際に 40 人前後の前で授業をしてみて、生徒一人ひとりに気を配りながら効果的な授業を行うことは容易ではないと改めて感じた。ある先生に授業を見ていただいたあとに、「生徒の方をちゃんと見ることはで

きてる？」とご指摘をいただいたことがある。この時に初めて、私は授業を進めることに精一杯で、生徒のことを見ることができていなかったことに気づいた。以降、私は授業の主役は生徒であり、教師は生徒の学びをサポートする役割なのだと考えを新たに授業をすることに努めた。

教職課程の総括して、教師とは、生徒が生徒自身の道を迷いなく進めるようにするためのサポート役なのだと考えた。生徒が道に迷い、立ち止まっているときは、先導して、時には背中を押してあげる、そのような存在だと私は考える。前述の通り、私は教師の道には進まないが、ここで学んだことを、社会に出て人と付き合う上で役立てていきたい。

9. 教職課程を通じて多くを学んだ大学生活　法学部法律学科　大杉峻矢

私は、大学に入学してからの 4 年間、多くのことを学ぶことができたと感じている。その多くは紛れもなく教職課程での経験であると考える。

教職課程を履修し、感じた最大の学びは、教師という職業の奥深さである。私自身、中学生の頃から漠然と将来を考えるうちに学校の先生になりたいと思い、教職課程を履修した経緯がある。もちろん、学生の視点からでしか教師、そして学校を考えたこともなかった。教職課程を履修し、教師は学校全体をさまざまな視点から観察する必要があり、さまざまな視点から物事を考えていかなければならないと感じることとなった。

教師の最も大きな職務はやはり教科の指導である。生徒の前に立ち、わかりやすくかつ興味を引きつけなければならない。一つの物事をさまざまな視点からとらえ、生徒に考えさせる授業を展開することで、より良い授業を展開することができる。この点で一つ教師は工夫を施さなければならないと考える。次に、生徒指導である。教師は授業のほか、クラス担任や副担任など、生徒と密接にかかわる必要がある。その中で、生徒ひとりひとりのことを深く知り、それぞれの生徒に合った指導を心がける必要がある。昨今では、SNS 等の普及もあり、直接的には見えない問題も多く存在している。そういった中で、教師は生徒への最大限のサポートをするべく、さまざまな視点から考えていかなければならないと考える。

これらは本学へ入学後から教育実習が始まるまでの約 3 年半にて座学や模擬授業を通して学んできた。そしてこれまで学んだことを活かすべく、母校の高校にて教育実習へ向かったが、座学では分からない現場の大変さを知ることとなった。まず、ICT 教育の発展である。私が学生時代はパソコンやタブレットを使用した授業などは 1 度も経験がなかったが、現在の母校では全校生徒全員がタブレットを持参し授業に参加し、また、黒板には電子黒板が設置されていた。これらに対応する点でまず苦戦した。また、授業づくりの大変さである。大学においての模擬授業においては、生徒役となる学生は皆真剣に話を聞き、積極的な授業参加を行ってくれたが、現実では、大半が歴史には興味のない生徒であり、興味を引きつける点に苦労した。また、3 週間と短い期間も影響し、生徒それぞれの特徴や性格を把握することに苦労した。教育実習を通じ、座学では感じることのできない、教師という職業の奥深さ、そして大変さを直に体験することができ、より一層教師への尊敬を感じるとともに、とても貴重な経験を行うことができ、教職課程を履修していて本当に良かったと感じることとなった。

大学生活、特に 2020 年からの 3 年間はコロナ禍により、思い描いていた大学生活とはかけ離れた毎日となった。大学に通う回数は極端に減り、授業はオンラインがほとんどとなり、友人と会う回数も減ってしまった。しかし、教職課程の授業においては、模擬授業や討論を行うことも多いことから、対面の授業も多く行われた。実際に、2020 年度は週に 1 度、1 時間のみ教職課程の授業のため大学へ足を運んでいた。このこ

とが私自身の救いともなったと感じている。もちろん、コロナ禍においての大学生活は大変であり、不自由なことも多くあったが、教職課程を履修しているからこその充実さを経験することができたと感じている。

私自身は、大学卒業後はすぐには教員の道へは進まないが、この 4 年間の教職課程で学んだことを今後の人生に活かしていきたい。

10. 教えることと ICT 機器との関係　法学部法律学科　亀井翔太

私は、2022 年 5 月 30 日から 6 月 18 日までの 3 週間、母校の成城学園中学校高等学校で教育実習を実施した。卒業をしてから 4 年しか経っていないはずなのに、教科によっては授業スタイルが大きく変化していた。記憶違いでなければ、私たちが高校 3 年生の時に入学してきた 1 年生全員に iPad が支給されていた。その iPad を用いて英語の課題を行なっていたようだ。すなわち、2018 年度から徐々に ICT 機器を用いた教育活動に取り掛かっていたというわけである。ただし、奇しくも 2020 年春の一斉休校がきっかけとなり、ICT 機器を用いた活動が活発となったようである。ICT 機器を用いた活動が活発となった学校現場で教育実習を行うことができたのは、とても貴重な体験であった。

教育実習の最終日に社会科の先生が、「教えるということは、目の前にいる生徒にどのように「伝えるか」ということだ。」と仰っていた。私も教えるということは伝える技術が必要不可欠であると 1 年次から考えていた。もちろん、教科によって必要な技術は異なるだろうが、コロナ禍において、教師の持つべき「教える技術」が何段階か上がったと感じている。たとえば、先に述べたように ICT 機器の活用が活発となった。私たちが授業を受けていた時よりも教師に生徒への伝える手段が増えたとも言える。もちろん、昔ながらのチョークと黒板という授業スタイルにも良さはある。しかし、人間は文字だけでは飽きてしまうという贅沢な性質を持つ。ICT 機器を用いた授業は、その飽きを防ぐための一つの手段になったと感じた。

ただし、ICT 機器を用いるのは伝えるための一手段に過ぎない。すなわち、ICT 機器を用いたからといってわかりやすく生徒に伝わるとは限らない。たとえば、文字で埋まっているパワーポイントの画面と、少しの文字と 1 枚の写真があるパワーポイントの画面。どちらが見ていて飽きないだろうか。多くの人が後者だと感じるだろう。伝えるために ICT 機器を用いたがその結果、より伝わらないという悲劇を生む可能性は十分ある。ICT 機器に関する知識だけでは不十分であるということだ。先に述べたように、教えるということは伝えるとうことである。人がコミュニケーションを取るときに挙げられるものに、メラビアンの法則がある。それによれば、人は 55% を視覚から、38% を聴覚から情報を得るという。授業において、視覚情報は写真などを用いたパワーポイントで賄える。また､聴覚情報は声のトーンや抑揚が挙げられるだろう。このようにして、人に伝えるときには視覚情報が大切である一方で、教師がどこに立っているか、どのような身振りをしているかも重要となる。

教師が授業中にどこに立っているのか、どのような身振りをしているのかを意識的に考えて教壇に立たなければならないものだと学んだ。授業は世の中でいうところのプレゼンテーションのようなものであると感じている。どのようにして相手に伝えるかは教師にならなくても、社会で必要なスキルである。そのスキルを教育現場という生徒の人生を左右する場所で経験させていただき、どのようにすれば相手に伝わるのかを学ことができたことにこの場をお借りして、感謝申し上げたい。

11. 貴重な経験　法学部法律学科　渡辺厚卓

私は母校である北海道の私立高等学校で２週間教育実習をさせていただきました。母校で教育実習を行うことができ、先生方は自分が高校生の時にお世話になった人達ばかりだったため、とても恵まれた環境で教育実習を行うことができたと思います。ただ教育実習生としてお世話になっているという自覚は決して忘れず、高校生の時のような態度や接し方をせず、常に教師としての対応や心構えをするように心掛けていました。

教育実習では２年１組から４組までの政治経済の授業と２年４組のホームルームを担当しました。まず教育実習をするにあたって最初に始めたことは授業見学です。２年生だけでなく、１年生と３年生のクラスにも授業見学を行い、生徒の雰囲気を掴むとともに、様々な教員の授業を展開方法や発問、抑揚等といった視点から分析し、自分の授業にどう生かせるかを常に考えていました。

実際に授業を行うようになったのは実習３日目からでした。指導教諭から事前に実習期間の２週間で終わらせなければならない授業範囲を指定されており、その範囲がかなり広かったため、重要な部分とそうではない部分の取捨選択をする必要がありました。それでも想定していたよりも授業進度が遅くなってしまいました。その理由として、母校が板書形式で授業を行っていたからです。

成城大学の模擬授業では PowerPoint とプリントを基に授業を行う練習をしていましたが、母校の授業では PowerPoint やプリントは使わず、板書中心の授業であったため、生徒がノートに書き写す時間と板書する時間を考慮した授業作りがうまくできませんでした。また、生徒が見やすい板書作りや重要な語句の色分けや適切な文字の大きさ等も全く分からなかったのでとても苦労しました。放課後に指導教諭と何度も板書の仕方、板書案構成の練習を行い、教育実習の後半になるころには適切な文字の大きさや板書構成を理解することができました。

しかし、生徒がノートに書き写す時間についてはクラスによって大きく違い、想像よりも生徒の書き写す時間が遅かったので、どんな状況にも対応できるように事前の準備ももっと念入りに行うべきだったと反省しています。これから教育実習を行う人は教育実習先が授業をどのような形式で行っているかを早い段階から確認しておいた方が良いと思います。

授業は内閣、裁判所、地方自治を教科書中心に教えました。この範囲は単に教科書に沿って授業すると生徒が眠くなる内容になってしまうので、資料集や参考書にある豆知識や生徒に身近な話題を用いることによって、生徒が眠くならず、授業に集中できるように工夫しました。また、授業内容に発問を多く取り入れることによって、生徒が授業に参加できるようにしました。しかし、発問を授業に取り入れすぎると授業進度に遅れが生じるので、授業進度に影響及ぼさない程度の発問量を意識して授業を構成しました。

個人的に教育実習中の生徒との関わりは少なかったと感じています。教育実習が始まる前は昼ごはんの時間に生徒と話して仲良くなろうと考えていましたが、コロナの影響で昼ご飯を一切話さずに食べるルールがあったため、なかなか生徒とコミュニケーションをとる時間を確保できませんでした。それでも放課後の掃除時間や部活動参加を通してできるだけ生徒と交流を行い、教育実習生として現役大学生として生徒に伝えられることを伝えることができたと思います。

２週間という短い期間の教育実習でしたが、貴重な経験を数多くしました。これも教職課程を履修していたからできたことです。教職課程を通して、人とどのように接するべきなのか、日本の問題を考える際の多角的な視点の持ち方、教育の在り方など数えきれないほど様々なことを学びました。このような学びは教職課程を履修していない大学生活では決して学ぶことができていなかったので、教職課程を履修して本当に良

かったなと思っています。教職課程で学んだことは教師という職業に就かないから無駄ということではなく、今後の人生に活きると確信しています。

第二節　課外活動を含む大学における学び

本節には、課外活動を含んだ大学における学びを意味づけたレポートを収めている。前節で見た教職課程を通じた学びとは対照的に、ここに収められたレポートからは、受講生たちに対するコロナ禍の影響が未だ大きなものであることを改めて理解することができるし、その影響を受けた状況において受講生たちが他者とかかわりながら変容する姿、またその変容をどのように感得しているのかを認識することができる。

1. コロナ以前、コロナ禍、そして戻りつつある日常　経済学部経営学科　有塚大稀

大学4年間の生活は入学時には思いもしていなかったことの連続だった。授業スタイルやサークル活動、人間関係など高校とは全く別の環境が新鮮であり、まずは1年を通して慣れることで残りの3年間を有意義に楽しもうと考えていた。また、大学祭実行委員会に入部し、大規模なイベントを先輩方、仲間とともに運営することは私にとって最も充実した経験であり、その感動をまた創っていこうと力を入れて取り込もうとしていた矢先にコロナ禍となった。

まず初めに私は2020年の3月にアメリカに短期留学する予定だった。世界的に新型コロナウイルスが猛威を振るい始め、中止の連絡がきた。当初は1年ほど経てばコロナは終焉するだろうとも言われており、今年1年我慢しようと思い、慣れないオンライン授業を受け、友人との遊びも控えながら自宅でいわゆる「おうち時間」を過ごしていた。外にほとんど出ず、友人と会えない中で映画を見たり、本を読んだり、ギターを始めてみたりと一人で楽しむこと悪くないなと感じた。

しかしそのような中でもやはり人と話したい。その時に流行ったのがZoom飲みであった。それまでZoomは授業でしか使用していなかったが、サークルの仲間や大学の友達だけでなく、遠く離れている地元の友人とも顔を合わせて話すことが簡単になり、家にいながら人と繋がることが収穫だった。

そして2年目の大学祭の準備をすることになった。大学からは例年通りの開催はできないと言われ、一時は開催しないという選択肢もあったが、違う形態であっても大学祭の文化は途絶えさせてはならないという気持ちから、初めてのオンライン開催を企画した。2020年度に入学した1年生は入学したときからオンラインであったため、なんとか大学の魅力や楽しい雰囲気を感じてもらおうとオンライン会議を通して議論し、成功を収めることができた。

そして3年目。人数制限付きでの対面、そしてオンラインのハイブリッド開催を企画し、失われていた学生生活が少しだけ取り戻せたような気がした。大学祭スタッフや参加団体の1・2年生は大学での初めての大規模イベントであり多くの人の笑顔が見られた。私は入部した際に多くの学生を笑顔にしたい、大学生活に彩りを与えたいと考えていたため達成感とやりがいを感じることができた。引退式では多くの後輩に入部してよかった、来年は今年よりももっとすごい大学祭にすると言ってもらえて、貴重な大学生活に少しでも貢献できたかなと思った。

OBとして参加した4年目の大学祭。今年度は3年ぶりの完全対面開催ということで学生だけでなく、地

域の方々にもご来場していただき、成城大学が地域に根付いているという繋がりを実感することができた。また、少しずつ日常に戻っている中でいつの日かマスクを外して食べ歩きをしながら声を出して楽しめる大学祭が開催されることを願っている。コロナ禍という状況の中で、学生たちが知恵を絞り合って、時間をかけて大学祭という大きなものを創り上げられたことはとても自信になった。

4年間を通して学んだことは何事も興味を持って自分から動き出すことで予想だにしていない出会いや体験ができるということだ。コロナ禍で大学生活の思い出がほとんどないという学生もいるなかでも私は楽しく充実した大学生活を送ることができた。

2. コロナ禍と大学生活　経済学部経営学科学生

新型コロナウイルス感染症が流行し始めたのは、私が大学1年の終わり頃だった。授業は対面で行われ、部活も当たり前に活動できる、いわゆるこれまでの普通の大学生活を送ることができたのはこの1年間だけだった。コロナ禍になり、大学生活が大きく変化するとともに、この期間は私が教職課程で学び、教師を目指すきっかけともなった。具体的に学生生活はどのように変化したのか、学習面、部活動、教職課程の3点から述べていく。

まず、学習面での大きな変化は「オンライン授業」になったことである。大学1年の頃は、通常通り対面で授業が行われるため、毎日大学に通うことが当たり前だった。しかし、大学2年になると、全てオンライン授業に変わった。授業によってリアルタイムで行われるものもあれば、各自で受講するオンデマンド方式のものもあった。初めはどのように授業を受けるのか、どのように課題を提出すればよいのか、わからないことで溢れていた。そのような時は友人と連絡を取り合い、協力しながら取り組んだ。このように、オンライン授業に慣れるまでは大変だったものの、順応していくと私にとっては有意義な時間だった。私は自宅から大学まで往復4時間かかるため、その時間を授業や課題に充てることができたのはとても良かったと感じている。

学習面では良い点があった一方、部活動は悔しいことの連続であった。私はワンダーフォーゲル部に所属しており、大学1年の頃は毎月登山をしていた。基本的に金曜日の夜に出発し、土曜日と日曜日の2日間で活動する。そのため、金曜日は15キロ以上のリュックを背負って大学へ行き、授業後そのまま山梨県や長野県に向かうという、今考えるとなかなかハードな生活を送っていた。しかし、コロナ禍になると当然、登山は一切できなくなってしまった。再開の目処が立たない状況の中、新歓活動と部員の士気を保つことが大変だった。対面で新歓活動ができない状況において、まずどのように部活を知ってもらうか、次にどのように部活の魅力を伝えるか、信頼してもらえるか、同期のみんなと何度も話し合った。結果的にSNSが好評を博し、多くの部員が入部してくれた。新歓活動は順調に進んだが、宿泊を伴う活動は許可が下りず、思うように活動できないまま一年が終わってしまった。いつ許可が下りても活動できるよう、共通のアプリを利用して体力作りの成果を共有したり、Zoomで定期的に交流会を開いて仲を深めたりしていたため、とても悔しい現実だった。不完全燃焼のまま引退したため、登山は今後の趣味として続けていきたいと思う。

授業はオンラインになり、部活動はできなくなってしまったため、必然的に一人の時間が増えた。私の場合は大学1年の頃にできた友人と連絡を取ったり、一人の時間が好きだったりということもあり、孤独を感じることは全くなかった。しかし、一人の時間が増えたことにより、漠然としていた将来について考えることが増えた。自分の興味があることや職業について改めて考えていく中で、教師に興味を持ち、教職課程に進むことを決断した。取得しなければならない単位は膨大で、何度も挫けそうになったが、教職課程で新た

にできた友人と自分自身の目標のお陰で踏ん張ることができたと感じている。特にコロナ禍で友人をつくることが容易ではないなか、切磋琢磨できる仲間ができたことは、私の大学生活においてかけがえのないことだった。

コロナ禍の大学生活は、高校生の頃に思い描いていたものと大きく異なり、不慣れなことや悔しいことで溢れていた。その一方で、この大変な時期を経験したからこそ出会えた人や、新たな目標に辿り着くことができたと考えると意味のあることだったと捉えることができる。この経験を十分に活かし、次のステージでも踏ん張っていきたいと思う。

3. 友情を改めて学んだ大学生活　文芸学部英文学科学生

私は大学で学んだこととして、交友関係を深めることの重要さを学ぶことができた。これは小中高とこれまでにも学ぶことができたのではないかと思う点ではあるが、私は高校時代が単位制であったため、クラスで団結することも少なく、また部活にも所属していなかったので、友人との助け合いを大切だと捉えていなかった。そこで、4 年間の大学生活を経て改めて交友関係の重要性を再確認することができた。

まず友人が自分にとって特に大切だと学ぶことができたきっかけは、コロナ禍でのオンライン授業生活である。私たちの学年はコロナウイルスが流行する前に 1 年間登校できていたため、通常通り学校生活を行うことができ、その一年間で友人関係をある程度構築することができた。しかし 2 年生になり、前期の授業がオンラインで始まってみると、一つ一つの授業の課題が多く、アルバイトもできないほど課題に追われる日々となった。毎日 Zoom を開いて、先生方の講義を 1 日聞き続けるのは先生方も大変だったと思うが、私自身も心身ともに疲弊していくばかりだった。だが時々 Zoom 上において、グループディスカッションを行った延長で雑談を交わしたりすることで、このような辛い日々を乗り越えることができたと思っている。鶴見良次先生の英語文化アカデミックプラクティスの授業では先生が学生の気持ちを考えてくださり、授業のはじめのアイスブレイクとして雑談の時間を設けてくださったこともあった。オフラインで会話を交わすのが当たり前だったコロナ前とは異なって、オンラインでランダムに Zoom のブレイクアウトで出会う人と話すことで、授業の内容以外での会話ができ、オフラインではもしかしたら縁がなかった人とも友人関係を構築することができた。そしてこれらの友人関係にコロナ禍での大学生活を救われた。

次に部活動でも同じように友人同士での協力で大きなイベントを成功させることができた。私は照明局に所属しており、主に 11 月に行われる大学祭で活動していた。引退年度であった昨年度は、コロナウイルスの影響によって 2 年ぶりの開催となり、私たちも分からないことばかりのなかでリーダーシップを取らなければならず、また我々以外の 1・2 年生は大学祭に初めての参加となり、照明設置の基礎も定着していない状態で大学祭を迎えることとなった。

私はその中でも、成城コンテストという広告研究会の方が主催するイベントで照明を担当することとなり、1 ～ 3 年の各学年 2，3 名いる担当者の中で副リーダー的なポジションを務めた。1，2 年生が何をすればいいのか分からない状況で、私たちの学年が中心となって活動しなければならないのに、私たち自身もその教室でイベントを行うのは初めてだったため、1 ヶ月行われるリハーサルの数回は限られた時間で設置することが非常に難しかった。

このような困難な状況の中で乗り越えられたのは、自分が信頼する同期が手伝ってくれたからである。私たちと同じように他の同期にも後輩が居て教えなければならないことがたくさんあり、また部活動全体の仕事を抱えているはずなのに、設置する最初の数十分だけ準備をしに来てくれたことがあった。今考えると、

同期は活動の仕事として義務的に手伝ってくれたのではなく、友人として私たちの大変さを理解して協力してくれていたのだと思う。いつも活動が終わった後に、同期同士で苦しみを共有したり、励まし合ったりしていたので、自分自身も友人として他の3年生を助けようと思っていたし、助けてくれた同期も友人として精一杯協力してくれていたのだと思う。このような協力によって分からないことばかりで始まったイベントも、成功することができた。

4年間での大学生活を通して、卒業後も大学で得た友人は大切にしたいと改めて思うことができた。また大学以前に出会った友人も自分を助けてくれる人であると再認識し、自分自身も助けられるよう今後も努力したいと思う。

第三節　大学以外の場も含む4年間の学生生活を通じた学び

本節には、学生生活全体を通じた学びを綴ったレポーを載せている。大学における学びに関する叙述だけでなく、塾講師を始めとするアルバイト、教員採用候補者選考の準備と当日の様子、親友との出会いと別れ、一人暮しの生活といった大学とは異なった場における経験、学びも綴られている。それゆえ、受講生たちのレポートは、2019～22年度に大学生たちが大学以外の場で遭遇した困難、あるいはそれらの場を通じた成長を認識することができる手掛かりを提供してくれることだろう。

1. 四年間での学び（主にアルバイトを通して）　文芸学部国文学科学生

四年間の学生生活で、たくさんの学びを得ることができた。大学二年次からはコロナ禍で、さまざまな活動が制限され、これまで通り学校に行って授業を受けたり友人とかかわったりするのが難しく、ICT機器の利用が余儀なくされたが、その中でも工夫して学び、教育や国文学について知識を深めることができた。このような四年間で、私にとって印象的だった経験の一つが個別指導塾でのアルバイトである。

個別指導塾でのアルバイトは大学一年生時から現在まで四年間続けていて、さまざまな生徒や同僚とかかわる良い機会となった。塾が対象とする生徒は小学校三年生から高校三年生までと幅広く、また教育実習等よりも長期間、近い距離間で関わることができたため、これから教職に就くにあって非常に良い経験となったと感じている。このアルバイトで特に自分にとって良い学びになったと感じる点が三つある。

一点目は、先ほども述べた通り様々な年齢、個性、ニーズをもった生徒にかかわることができたことである。私が勤務していた塾は勉強が比較的苦手な生徒が多く在籍していた塾で、学校の授業に全くついていけない生徒も中にはいた。そのような生徒に勉強を教えたことで、生徒が抱える学習での困難や、一斉教授の難しさを知ることができた。そしてそれと同時に、生徒と関係性を築くことによって思春期の子どもたちの学習に限らない家庭や友人関係での悩みも聞くことができ、生徒の実態を知ることができた。また、さまざまな生徒と向き合うことで自分自身とも向き合うことができ、自己を成長させることができたと感じている。さらに、大学の授業で教育相談や青年心理学について学んだが、アルバイトで常に児童生徒とかかわることができたため、学んだことを実践することができたのも私にとって良い経験になったと考えている。例えば、傾聴の方法を学んだ時は生徒の言葉や感情を引き出せるよう話を聴くことができたし、軽度ではあったが自閉症の傾向がある生徒に接したときは特別支援の授業で学んだことを生かし、その生徒にどんな配慮が必要

か考えることができた。

二点目は、生徒と進路相談や将来の話をするにあたり、「教育とは何か」と考えることができたことである。私は塾講師として働くことを通して、目の前の子どもたちがより豊かに、幸せに生きていくためにはどうしたらよいかを考え続けた。そうして働くうちに、そのように考え続け、自分にできることを行う事こそが教育なのではないかと考えるようになった。具体的な内容は学力を向上させることであったり、生徒指導であったり、さまざまな側面があると思う。私は国語科教師として、「言葉」の役割や豊かさを伝えることを通して「世界」の広がりや他者と分かり合う喜びを伝えたい。そして、子どもたちがより幸せに生きていけるようにかかわっていきたい。私は塾講師として生徒にかかわる経験を通して、教師としてどう生きていくべきか自分なりに考えることができた。

三点目は、多くの先輩や後輩、同僚とかかわり、自分一人ではなくチームとして生徒にかかわるという経験ができたことである。現在、「チーム学校」と言われるように、これまで以上に教職員や様々な学校関係者が協働するということが求められている。それぞれの個性を生かしながら、他者と助け合って学校をつくっていくその一員となるにあたって、チームで何かを成し遂げる経験は今後に生きると考える。塾では、生徒が楽しく通える塾にするため、また成績が上がる塾にするために、多くの先生と協力してその環境づくりやシステムづくりを行った。目的や方法は学校と塾で異なるが、チームで生徒の成長にかかわっていくという点では近い経験ができたのではないかと考えている。

この三点は主たるもので、ほかにも生徒や仲間と沢山かかわることで得られた経験は多くある。四年間のアルバイトで最も良かった点は、生徒・先生に限らず広くかつ深く人間関係を築けた点だと考える。人間関係の築き方を学び、またたくさんの人と向き合うことで自分自身を見つめなおし、自己を成長させるきっかけともなった。教職についてからも、この四年間の経験を活かしたくさんの子どもたちや同僚の先生方・管理職の先生方と積極的にかかわっていきたい。そして、生徒がより幸せに生きていけるよう、授業や関わりを模索し、自己を成長させる「学び続ける教師」でありたい。

2. 塾講師のアルバイトについて　文芸学部国文学科　初見千夏

私は学生生活では、特にアルバイトを努力してきた。アルバイト先は個別指導塾であり、私はそこの塾講師として勤務してきた。大学１年生から始めたアルバイトなので、大学入学時から卒業時までずっと続けてきたと言える。中学生の頃から教育業界に関心があった私は、将来に繋がればいいなという気持ちでアルバイトを始めた。自分自身、高校生の頃に１年間同じ塾に通っていた経験があったので、内部のことはとても良く知っていた。そして、先生たちが楽しそうにしている様子や華やかな雰囲気の印象が強く、ここでアルバイトができたら楽しく授業もできそうだと思っていた。

しかし、しばらくは仕事量と忙しさに驚く毎日だった。特に困難を感じたのは、授業内容の予習や確認テストの制作である。私の働く塾では講師１人に対して生徒２人を指導する。生徒の学年は小学１年生から高校３年生までと、実にさまざまだ。さらにひとりひとりに対応した授業を行うため、授業内容は日によって異なってくるのだ。だからこそ、授業の前にはその日に教える内容を確認し、不安な場合は復習や授業準備を行わなくてはならない。また、子どもたちの理解度を把握するための確認テストとして、前回の授業範囲を踏襲した問題を作成しなくてはならないのだ。そのような勤務時間前後の作業は無給で行われることが多く、飲食や販売のアルバイトをしている友人からは「やめときなよ」「ブラックだね」と言われることも多かった。

ただ、それでも続けられたのは、単純にこの仕事が好きだったからだと思う。私は子どもたちと話したり、勉強を教えたりすることが好きだ。さらに、私が勉強を教えた結果、子どもたちの解ける問題が増えたり、苦手が解消したり、そのような経過を直接見届けられる、人に良い影響を与えた感覚をダイレクトに受け取れる仕事はあまり多くないのではないか。だからこそ、きついと思ったときも続けることができたのだと思う。

ただ、塾講師のアルバイトが順調に行かない要因もあった。それが、大学2年生時のコロナウイルス感染症である。最初の緊急事態宣言が発令されたとき、学習塾も開校できない日が続いた。その時期は、授業をできないことはもちろん、子どもたちとコンタクトを取ることさえ許されなかった。テストや受験に目標を持つ子どもたちの不安は私たちより大きかっただろう。宣言が明けてからも、しばらくはZoomを用いた授業が行われた。オンラインでの授業はラグや画質の問題があり、あまり質が良いとは言えなかった。

完全に対面の授業を再開させたときには、子どもたちは緊張しながらも嬉しそうに塾に来てくれた。授業もラグや板書の見づらさの問題が解消され、お互いに心地よくできたと思う。やはり学習塾の売りで、初めに挙げられるのは対面による授業なのだと心から感じる機会になった。最近はオンライン授業やe-learningの需要が高いが、それでも教育サービスから対面授業による学習塾の価値は変わらないし、それらが消えることはないだろう。

よく塾講師と教員の対立を語る人もいるが、私にとって塾講師はあくまで補助的であり、教員という仕事にリスペクトがなければ成立しないと考えている。大学4年間、教職課程を取りきることができたのも、教育への問題意識や関心を常に向け続けなくてはならない塾講師のアルバイトがあったからだと思う。大変なことも多かったけれど、学生生活でアルバイトを頑張ってきてよかったと感じている。

3. 成長　文芸学部英文学科　園田楓

私は4年間の大学生活を通して様々なことを学び成長することができた。ここでは大きく分けて3つ、成長したことを記したいと思う。

1つ目は人との関わり合いである。大学進学を機に地元の群馬県から上京し、学校生活やアルバイトなどを通して多くの人と関わることができた。以前は自分と仲の良い人間や一緒にいて心地良い人間と関わりを持っていたが、東京で多くの人と出会い、多様な人間性や価値観に触れることで他者との関わり方を学ぶことができた。自分とは異なる考え方や価値観を持った人間を否定し、敬遠するのではなく、適切な距離を保つことにより、良好な関係を築けることを学んだ。「敵をつくらない」これが私のモットーである。悪く言えば「八方美人」、しかしこの考え方が今後、生きていくうえで非常に重要なことだと私は思う。

2つ目は大人としての自覚を持ち、高校卒業から現在に至るまですべてを自分1人の力で出来るようになったことである。学費及び家賃を含む生活費全てを自ら工面し、物件の契約からその他の手続き、1人暮らしを始めたことで家事も人並みにできるようになった。また大学3年生になり起業したこともあり、従業員の生活を守らなくてはならないという責任感やそこから生じるプレッシャーにより精神面でも成長することができた。大学3年生から4年生にかけては大学の授業と自らの事業を掛け持ちし、授業の前後や大学がない日は殆ど自らの事業に時間を費やした。体力的に厳しい期間もあったものの、持ち前の気合と根性で乗り切ることができ、更に成長することができた。事業も関東全県にまで拡大し、今までの努力を形にすることができたことを誇りに思っている。

3つ目は両親や友達をはじめとする大切な人々へ感謝の気持ちを感じることができた点である。上記した

ように地元を離れ、上京し、1人暮らしを始めたことで改めて周囲の有難さに気が付くことができた。決まった時間に食事が用意され、家事をする必要がなく、自分でお金を稼ぎ、支払うことも無い環境が如何に恵まれていたのかを考えさせられた。また、孤独を紛らわせてくれる地元の友達の存在、仕事や将来への不安を感じた際に寄り添ってくれる大切な人の存在が如何に尊いものであるのかを考えさせられた。今後も常に周囲の人間への感謝を忘れない人間でありたいと思う。

私は大学4年間を通して見違えるほど成長したと胸を張って言える。高校3年生の時に都内の大学に行こうと決断して良かったと心から思えている。成城大学での4年間は時が経つのが非常に早かった。今思えば、もう少しやれることがあったのではないか、もう少し努力することができたのではないかと思うことが度々ある。しかし過ぎてしまったことはどうしようもなく、これからどのようにしていくかが重要である。この4年間で培った知識、自信と少しばかりの後悔を糧に今後、自分の人生をより豊かにできるよう精進していきたいと思う。

4. 親友との別れでの気づき　文芸学部英文学科学生

私は、大学4年間の中で多くのことを学び、感じ、成長してきた。高校3年の夏、英語の勉強に面白さを感じ、英文学科で学ぶことを志した。そして実際に成城大学の英文学科に合格し、これから来る自分の大学生活に大きく期待した。また、大学に入ったらやりたいこと、達成したいことを書き起こし、意識を高く持ってさまざまなことに挑戦しようと考えていた。大学1年次では、そのメモをもとに本当にさまざまなことに取り組んだ。学科での勉強はもちろん、留学生と関わる国際交流サポーターになったり、短期留学をしたり、テニスサークルに入ったり、大学内での英会話に参加したり、教職課程の授業を履修したり、気づけば学内を歩けばどこでも友人や知り合いとすれ違い、声を掛け合っていた。そして幸せなことに、さまざまな事に挑戦していると、そこでとても素敵な人たちと出会い、親しくなることができた。ここでは、私がどんな人と出会い、何を経験し、何を感じ、人間として成長できたのか、そこで得た学びの一つを紹介する。

大学生活の始まりである1年生で、特に自分を成長させてくれた人は、一人の留学生だった。国際センターが主導している、月に一回のコーヒーアワーで、とある留学生と出会った。初めてコーヒーアワーに参加した私は、緊張はしていたため、ヨーロッパから来た学生達に話しかけることは難しく感じていた。

しかし、オーストラリアからきた、中国人の留学生だけには、なんとなく話しやすい雰囲気を感じた。話してみると、日本語がその場にいた留学生と比べても格段に上手で、スラスラと会話ができた。話していると、とても優しく、仲良くなりたいと思った。もともと、留学生と仲良くなってみたいと思っていたので、彼と連絡先を交換した。その後、実際に一緒にいられた時間は3か月ほどだったが、毎週彼の住んでいる寮に遊びに行ったり、泊まったり、大学内でも一緒にご飯を食べたりしているなかで、私達はお互いを親友と呼べるような関係になった。7月の私の誕生日には、彼が鎌倉の花火大会に誘ってくれた。私が寮に通い詰めていたおかげで仲良くなれた、そこに住んでいた日本人の学生と2人で、プレゼントも用意してくれたことが、本当に嬉しかった。

彼はよく手紙を書く人だった。色々なタイミングで私に日本語で書いた手紙をくれた。彼の日本語は必ずしも正しいとのではなく、字も私に比べれば上手くはなかったが、彼の私に対する思いやりや、誠実さが自分でも驚くほど感じられた。他の日本人の友達から、LINEで誕生日のメッセージを貰うことはこれまでもあったが、改めて文字で書くことの大切さに気づかされた。

そんな濃密な時間を過ごしていたが、別れは当たり前だが、やってきた。最後に彼と会った日、私は初め

て人と別れることを悲しんで涙を流した。夏の暑い日だった。私が寮に遊びに行くと、彼は必ず帰りに駅まで見送ってくれた。最後の日もそうだった。本当は彼がオーストラリアに帰る日に空港まで行きたかったのだが、私がアイルランドに語学研修に行くために、その日が最後になってしまった。駅で最後にハグをして、また会おうねと声をかけ、そのまま電車に乗った。そして私は泣いた。電車の中でうずくまって泣いていたので、周りから見ると相当変な人だったと思う。

しかし時間が経てば、新しい人と出会い、また刺激的な毎日が始まった。しかし、彼がいなくなった穴はすぐには埋まらなかった。そのため、私は新しくまた留学生と仲良くなろうと思った。新しくきた留学生に積極的に話しかけ、関係を持った。しかし、親友と呼んだ彼ほど仲良くなれた人はいなかった。そして気づいた。私は留学生と仲良くなりたかったから彼と仲良くなったのではなく、彼という一人の人を尊敬し、また彼からも尊敬され、仲良くなったのだった。そこから私は、人と関わる時に、相手の肩書きや、他の人からの評価を、それまでよりもより、気にしなくなった。自分が好きになった人は、好きで、素敵な人だと思うようになった。そしてそれは自分のことを信じることでもあると知った。私は大学生活の初めに彼に出会えたことが、その後の生活を豊かにするために、最も恵まれたことであり、幸せなことであり、誇らしいことであると思う。

5. コロナ禍で変化した学生生活　法学部法律学科　植野唯

私は、コロナ禍で変化した学生生活について述べることとする。

私は神奈川県横須賀市に住んでおり、成城大学まで片道 2 時間かけて通学している。そのため、大学一年生のときは、大学の授業と塾講師(集団塾と個別指導塾を掛け持ちしていた)のアルバイトで手一杯であった。

しかし、大学二年生の前期からコロナ禍での学生生活が始まり、オンライン授業が主流となった。すると、通学時間を確保せずとも授業を受けることができるようになった。授業を受ける前にレジュメやネット環境を準備する必要は生まれたが、これまでよりも時間に余裕をもって生活することができるようになった。

この、オンライン授業で生まれた余剰の時間をいかに活用するかが重要であった。

コロナが蔓延し始めた大学一年生の終わりごろから、私は、在学中に教員採用試験を受けることを決めていた。そのため、まず、ボランティア活動に取り組もうと考えていた。そこで、西郷孝彦元校長による改革で知られる世田谷区立桜丘中学校で、学校生活サポーターのボランティアに携わることとした。桜丘中学校にはおよそ 10 人に 1 人の割合で「特別な支援を必要とする子ども」が在籍している。この学校での活動を通して、彼らとともに学び、遊び、学校生活を豊かに過ごす支援をすることができた。このボランティアは、もしコロナ禍でなければ、通学時間や授業の都合で取り組むことはできなかっただろう。

次に、コンビニエンスストアと飲食店でのアルバイトを始めた。その理由は、個別指導塾の講師アルバイトやボランティア活動と並行して、教職関連ではない経験をしたいと考えたからである。塾講師のアルバイトでは小中高生を指導し、同僚も大学生が大半であったため、関わる年代が限定的であった。しかし、コンビニエンスストアや飲食店では幅広い年代や背景を持った顧客、社員、アルバイト、パートの方々との関わりをもつことができた。

そして、オンライン授業では、自分の学習ペースに合わせて授業を受けることができるため、スケジュールに余裕をもって課題に取り組むことができた。そのため、アルバイトやボランティア活動に力を入れながらも、コロナ禍において成績を維持することができた。

ただ、私はコロナ禍ですべてが好転したとは思わない。私はコロナの影響で、集団塾の講師アルバイトを

実質、退職させられた。集団塾では、中学生の社会科を指導していた。中学校社会科教師を志望していた私としては、最も将来に向けた活動の一つとして力を入れていた。しかし、コロナで経営方針が変わり、学生講師の人数が減らされてしまったのである。

また、コロナ禍が長引いたため、就職活動の時期においても「新生活」を意識せざるを得なかった。私は、教育実習、教員採用試験と並行して一般企業の就職活動もしていた。コロナに感染しないように気を付けながらも、コロナが蔓延しだしていた 2020 年、2021 年よりも規制が緩和された「ウィズコロナ」のなかでの就職活動は、予想以上に厳しく感じた。特にその理由として挙げられるのが、周囲に同じ立場の友人や知人、先輩がおらず、相談することができない環境であったからである。相談できる先輩方などとのつながりがあればと思いながら、コロナ禍で大学に通うことが少なかったため、人間関係を広げることが難しかったのである。

したがって、コロナ禍での学生生活は利点も多かったが、欠点もあったと感じる。しかし、コロナ禍を経て、改めて人との関わりやコミュニケーションの重要性に気付くことができた。

この経験を生かして、これからはより積極的に人と関わることに力を入れていきたい。

6. コロナ禍の学生生活と教採　法学部法律学科学生

教職課程では単位を取りきるための勉強量がすさまじく多い。大学に通いながらであれば、同じ教職課程の友人と雑談でもしながら遊ぶ時間と勉強する時間のメリハリをつけて、つらさがありながらも楽しく単位を取ることができただろう。しかし、2020 年の初めからコロナが蔓延し、その後の 2 年間は非常に制限された生活を送ることになった。特に大学 2 年次はすべての授業がオンラインになり、ただスライドが用意され、それについてコメントペーパーやレポートを書くような授業もあれば、たまに Zoom を使う授業があっても顔出しはせず、慣れていなかったからか積極性のかけらもない退屈な議論をして、ただ時間を無駄にするような授業もあった。毎日がその繰り返しで、友人と授業後に遊びに行くことはまだしも、外出することさえが憚られていたので、本当につまらない一年間であった。大学卒業間近の今、2 年生の頃を振り返っても退屈な日々を過ごしていたからかほとんど記憶に残っていない。

3 年生になってからは、オンライン授業が基本で教職課程のいくつかの授業だけが対面授業という形になった。週に 1，2 回大学に通い、授業を受けるだけでも、気分転換になり、コミュニケーションを取りながらの授業は印象にも残り、集中して講義に臨むことができたため、より深い学びをすることができた。4 年生になってからはほとんどの授業が対面形式となり、教職課程での授業量も落ち着いてきたので、2 年ぶりにキャンパスライフというものを楽しむことができた。コロナ禍の大学生活を通して、対面でコミュニケーションをとることの大切さを非常に痛感した。

次に、私の教員採用試験について少し振り返りたいと思う。わざわざ紀要に自身の教採の話を書くからには合格体験談を書きたいところではあるが、不合格だったので、その時の気持ちや受験生へのアドバイスなども書いていく。私が教採に向けた勉強を始めたのは大学 3 年の期末が終わった 2 月頃だった。教職教養の教科書と演習問題を購入し、4 月頃まで 1 日 1 時間を目安に取り組んだ。5 月には教育実習があったので、それまでに確実に 1 周して、苦手なところを把握しておくのが良いと思う。教育実習が終わり、6 月になると、演習量を増やすために 47 都道府県の過去問が載った参考書を解き始めた。これは大学図書館にあるのでぜひ利用してほしい。これを解くことで教職教養ではどのような問題が出題されるのかの傾向をつかむことができたので、自分が受ける自治体以外の問題も解いて正解だったと思う。一般教養も参考書を一冊解け

ば十分に本番でも点数は取れるはずなので、理系科目が苦手で不安な人も必要以上に焦らないでほしい。その後、7 月に入り、一次試験は無事突破して二次試験に向けて面接と模擬授業の準備を始めた。

8 月に入り二次試験まであと少しという時期に入った。しかし、ここで最悪の出来事が起きた。それは家族のコロナ感染であった。試験の 3 日前の出来事で、私自身は絶対にコロナに感染したくなかったので、試験までの 10 日間は家から一歩も出ていなかったが、家族が家に持ち込むという形で濃厚接触者になってしまった。それからは自室から一歩も出ずにとにかくコロナにかからないように心掛けた。

それでも私もコロナに感染してしまった。試験前日の夜にのどに違和感を覚え、とにかく寝ようと思い布団に入ったが、それからも、「もし明日熱があったらどうしよう」、「熱がなくても試験要項に濃厚接触者になっただけでも会場に来ないでくれと書いてあったな」、「一年後に受けなおすしかないのかな」、「2 年半コロナに感染しないように気を付けていたのにどうしてこんな時に……」と考え始めたら止まらなくなってしまい、ほとんど寝ることはできなかった。翌朝、熱はあったが、行くしかないと思い解熱剤を飲んで試験会場に向かった。試験はボロボロで、特に面接で頭が働かずスムーズな受け答えができなかったことをよく覚えている。家に帰り熱を測ると 39.8℃で、よく頑張ったなととりあえず自分を褒めた。試験が終わった瞬間に不合格だと確信していたが、落ち込む余裕もないくらい体がしんどかったのでそれから数日は療養することになり、私の教採は終了した。

教採を不合格になると卒業まで一般企業にシフトチェンジして就職活動をするか、地方自治体への講師登録をするかの選択を迫られる。私は講師登録をしたが、その場合は就職が決まるのは卒業式以降となる。周りの友人たちが就職先を決定する中で自分はなにも決まっていないことから不安になったり、両親から就職はどうするのかと圧力をかけられたりした。そこで、自分の夢は何であったか、なぜ教職課程をとっているのかなどを振り返り、ここで別の選択肢を選ぶと教師になることを諦めてしまうような気がしたのでこの決定をした。教採を受ける人たちにはもちろん在学中に合格するのが一番であるが、もしそうではなかった場合も目先の不安をなくすことだけを考えるのではなく、自分の人生、将来に向けて後悔の無いように慎重な意思決定をしてもらいたい。

おわりに

教職実践演習（中・高）の受講生のなかには、新任教師として、あるいは講師として教職に就く者、教職を志望しているが、さらに学ぶために大学院や専門学校に進学する者、他の職種に就く者が存在するが、多様な進路へとそれぞれ歩き始めることとなる彼ら／彼女らが、2019 ～ 22 年度の学びの軌跡をどのように描いているのかを、レポートによって辿ってきた。

教職課程は、当然のことながら、教師を育成するという使命を有している。しかし、それだけではなく、履修者が小学校、中学校、高等学校で生活するなかで自明視するようになっている学校教育の営みを、学問的に、そして教育実習などによって実践的に省察することを通じて、学校教育が子どもたちや社会に対して有している意味を認識し、その認識を梃子として、教職に就くか就かないかを問わず、履修者に学校教育の支援者となってもらうこと（そして将来的に、学校教育に諸資源を配分、投入することに同意してもらうこと）も重要な使命としている。

公教育には、子どもの学び育ち、社会の維持発展に対してポジティヴに機能する面だけでなく、ネガティヴに機能する面もあり、教職課程の授業では両方に言及することとなるが、レポート、特に第一節に掲載したものからは、受講生たちの多くが公教育をポジティヴに捉え、彼ら／彼女らに将来的な学校教育の支援者となってもらえることを期待できるように思われる。

しかし、教職課程が教師を養成するものとして、また登録学生に学校教育の支援者になってもらうものとして貢献しているとしても、本学だけでなく、日本の大学全体で教職課程に登録する学生自体が減少している状況が生じている。

OECD（経済協力開発機構）が実施しているTALIS（国際教員指導環境調査、Teaching and Learning International Survey）の第2回調査（2013年実施）で、日本の中学校教師の1週間当たりの勤務時間が調査参加34か国・地域のなかで最長であることが明らかになり、教師の働き方改革が学校教育界の大きな課題となった。しかし、TALISの第3回調査（2018年実施）でも、日本の中学校教師の1週間当たりの勤務時間は、調査参加48か国・地域のなかで最長であり、第3回調査から対象となった小学校教師に関しても、日本の教師の1週間当たりの勤務時間は、調査参加15カ国・地域のなかで最長であることが公表された。

教師の働き方改革にかかわる各種の答申、提言、ガイドラインが出されているが、教師の勤務時間は長いままに留まっているのである。短縮できない数多くの要因が存在するのであろうが、2020年以降は、COVID-19対応の諸業務が、勤務時間を短縮できない一因となっているのかもしれない[(3)]。

私が担当した教職実践演習（中・高）のクラスでも、教育実習で接した先生方の多忙さを報告した者が何人も存在した。そして、その多忙さを解消することが学校教育にかかわる喫緊の課題であり、その課題を克服できなければ、教職に就く者は増えないのではないかという懸念が共有された。

教職課程が前述した二つの使命に貢献し得るとしても、学生に教職課程に登録してもらわなければ、その使命を果たすことはできない。教師の勤務時間を短縮し、教職を巡る人々のネガティヴな視線を転換するには何ができるのかという大きな課題を、本学を含め、社会全体で考えなければならない。もちろん、他方で今後も、本稿に記載された教職実践演習（中・高）受講生が記してくれたような経験、学びを本学教職課程は提供しなければならないことは当然であるが。

最後に、多忙な時期であるにもかかわらず、またレポートの課題が振り返りたくない出来事を想起させる場合があったかもしれないにもかかわらず、この4年間の自身の経験、学びを綴ってくれた受講生諸君に対して、そして校正作業にご協力いただいた本学共通教育研究センター森俊二特別任用教授に対して深く感謝したい。

注

(1) マシュー・リップマンらは、「内在的な」意味と「非本質的な」意味を区別し、前者は「試合全体に対する一つのプレー、文に対する語、映画全体に対する一つのエピソード」などに見られるような意味を帯びた部分・全体関係であり、後者はAの達成にBが「外的ないし道具的に関係しているときに（意味が）生ずる」（括弧内引用者）目的・手段関係であると論じている（マシュー・リップマン、アン・マーガレット・シャープ、フレデリック・オスカニアン『子どものための哲学授業――「学びの場」のつくりかた――』河野哲也・清水将吾監訳、河出書房新社、2015年、29-31頁）。

(2) 文部科学省「令和3年度　公立学校教職員の人事行政状況調査について」（2022年12月26日）（2023年1月22日取得、https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinji/1318889.htm）を見ると、精神疾患による病気休職者数が2021年度に過去最多を記録し、しかも精神疾患による病気休職者の在職者に占める割合を見ると、年代別で20代が他の年代よりも大きくなっている。以前の調査では、教職経験を蓄積している30代、40代の教師の割合が大きかった。30代や40代の教師は、他者から教師としての職業的社会化を終えていると見られるゆえに、困難に遭遇しても周囲の教師に相談できず、一人で問題を抱え込む傾向があったからである。一方、20

代の教師は自身も他者も教師としての成長過程にあると見るため、困難に遭遇した際に周囲の教師に相談しやすく、周囲もそれに応じるため、精神疾患によって休職する割合は小さかった。しかし、コロナ禍は状況を一変させ、20代の教師でさえ、周囲の教師に相談する機会を十分に得られずに孤立する事態が学校現場において生じている。感染を避けるためだけでなく、コロナ禍と連動した教師の働き方改革への要請も、若い教師が相談する機会を喪失させているのであろうが、子どもであれ、教師であれ、コロナ禍は誰にでも影響を与えているが、いわゆる「弱者」により大きな影響を与え、学校、職員室、教室において彼ら／彼女らを孤立させているのではなかろうか。

(3) 教師の働き方改革にかかわる答申、提言、ガイドラインについて、またそれらがなぜ実効的なものとならないのかについて、岩田一正「教師の働き方改革と学校の使命」(『成城教育』第196号、2022年、85-88頁）で言及したことがある。